

清貧の書

林芙美子

青空文庫

一

私はもう長い間、一人で住みたいと云う事を願つて暮した。古里も、古里の家族達たちの事も忘れ果てて今なお私の戸籍こせきの上は、真白いままで遠い肉親きおくの記憶の中から薄れかけようとしている。

ただひとり母だけは、跌つまずき勝ちな私に度々手紙をくれて叱しかつて云う事は、――

おまえは、おかあさんでも、おとこうんがわるうて、くろうしていると、ふてくされてみえるが、よう、むねにてをあててかんがえてみい。しっかりものじゃ、ゆうて、おまえを、しんようしていても、そうそう、おとこさんのなまえがちごうては、わしもくるしいけに、さつち五円おくってくれとあつたが、ばばさがしんで、そうれんもだされんのを、しつてであらう。あんなひとじゃけに、おとうさんも、ほんのこて、しんぼうしなはつて、このごろは、めしのうえに、しよおゆうかけた、べんとうだけでもつて、かいへいだんに、せきたんはこびにいつておんなはる、五円なおくれんけん、二円ばいれと

く、しんぼうしなはい。てがみかくのも、いちんちがかりで、あたまがいとうなる。かえろうごとあつたら、二人でもどんなさい。

はは。

ひなたくさい母の手紙を取り出しては、なみだ涙をじくじくこぼし、「誰だれがかえってやるもんか、いなか田舎へ帰つても飯が満足に食えんのに……今に見い」私は母の手紙の中の、義父がし醬油しょうゆをかけた弁当を持つて毎日海兵团へ働きに行つていと云う事が、一番胸にこたえた。——もう東京に来て四年にもなる。さして遠い過去ではない。

私は、その四年の間に三人の男の妻となつた。いまの、その三人目の男は、私の氣質から云えばひどく正反対で、へいぼん平凡で誇張こちようのない男であつた。たとえて云えば、「また引越つこしをされたようですが、今度は、淋さびしいところらしいですね」このように、誰かが私達に聞いてくれるとすると、私はいつものようにたの樂し氣げに「ええこんなに、そう、何千株と躑躅つづじの植つつているお邸やしきのようなどころです」と、私は両手をひろ拡げて、何千株の躑躅がいかに美しいかと云う事を表現するのに苦心をする。それであるのに、三人目の男はとんでもなく白氣しらけきつた顔つきで、「いや二百株ばかり、それもごくありふれた、種類の悪い躑躅

が植えてある荒地あれちのような家敷跡やしきあとですよ」という。で、私は度々引込みひっこのならない恥はずかしい思いをした。それで、まあ二人にでもなつたならば思いきり立腹りつぷくしている風なところを見せようと考えていたのだけれど、——私達はいっしょ一緒になつて間もなかつたし、多少の遠慮えんりよが私をたしなみ深くさせたのであろうか、その男の白々しらじらとした物云いを、私はいつも沈黙だまつて、わざわざ報いるような事もしなかつた。

もともと、二人もの男の妻になつた過去を持つていて、——私がかつての男たちの性根を、何と云つても今だに煤すすけた標本のように、もうひとつの記憶の埒内らうちに固く保存しているので、今更いまさら「何ぞなんかぞ」と云い合ひする事は大変面倒めんどうな事でもあつた。

二

二人目の男が、私を三人目の小松与一こまつよいちに結びつけたについては——

お前ちやうちやくを打擲うちやくすると

初々と米を炊とぐような骨の音がする

とぼしい財布の中には支那の銅貨が一つ
叩く^{たた}に都合^{つこう}のよい答^{むち}だ

骨も身もばらばらにするのに

私^{かへ}を壁に突き当てては

「この女メたんぽぽが食えるか！」

白い露^{つゆ}の出たたんぽぽを

男はさきさきと噛^かみながら

お前が悪いからだと

銅貨の答でいつも私を打擲する。

二人目の男の名前を魚谷一太郎と云つて、「俺^{おれ}の祖先は、渡^{わた}り者かも知れない。魚を捕^とつてカツカツ食つて行つたのであろう」そういうながらも、貧^{びん}乏^{ぼう}をして何日も飯が食えぬと私を叩き、米の代りにたんぽぽを茹^ゆでて食わせたと云うては殴^{なぐ}り、「お前は どうして そう下品な女のくせが抜^ぬけないのだ。衿^{えり}を背中までずっこかすのはどんな量見なんだ」と、そう云つて打擲し、全く、毎日私の骨はガラガラと崩^{くず}れて行きそうに打たれるためのデク

のような存在であった。

私はその男と二年ほど連れ添^そつていたけれど、肋骨^{ろつこつ}を蹴^けられてから、思いきつて遠い街に逃^にげて行つてしまった。街に出て骨が鳴らなくなつてからも、時々私は手紙の中に壱^い円札^{ちえんさつ}をいれてやつては、「殴らなければ一度位は会いに帰つてもよい」と云う意味の事を、その別れた男に書き送つてやつていた。すると別れた男からは、「お前が淫^{いんばい}売^{ばい}をしたい故、衿^{かたねり}に固^{かた}練^{ねり}の白^{おしろい}粉^こもつけたい故、美味^{うま}いものもたらふく食べたい故、俺から去つて行つたのであらう、俺は今日^{きょう}で三日も飢^うえてゐる。この手紙が着^きく頃^{ころ}は四日目だ、考

えてみる」――

この華^{はな}やかな都会^{かたすみ}の片隅^{はな}に、四日も飯を食わぬ男がいる。働こうにも働かせてくれぬ社会^{つば}にいつもペツペツと唾^{つば}きを吐^はき、罵^{ののし}りわめいている男が……私はこのような手紙には何としても返事が書けず、「あなたひとりに身も世も捨てた」と云う小唄^{こうた}をうたつて、誤^ご魔^ま化^かして暮^くしていた。

間もなく、魚谷と云う男も結^{けつ}婚^{こん}したのであらう、大変楽し気な姿で、細々とした女と歩いているのを私は見た事がある。ちようど、そのおり、私は白いエプロンを掛^かけていたので、呼び止めはしなかつたけれど、私も早く女給のような仕事から足を洗わねばならぬ

と、地獄壺じごくつぼの中へ、働いただけの金を落して行く事を楽しみとしていた。

それから、——幾月いくつきも経たないで、正月をその場末のカフェーで迎むかえると、また、私は三度目の花嫁はなよめとなつていまの与一と連れ添い、「私はあれほど、一人でいたい事を願つていながら、何と云う根気のない淋しがりやの女であろうか」と云う事をしみじみ考えさせられていた。

三

「君は前の亭主ていしゅにどんな風に叱られていたかね……」

与一は骨の無い方の鰯あじの干物ひものを口から離はなしてこういった。

「叱られた事なんぞありませんよ」

「無い事はないよ、きつときつい目に会つていたと思うね」

私は骨つきの方の鰯をしゃぶりながら風呂屋ふろやの煙突えんとつを見ていた。「どんなに叱られていたか」何と云う乱暴な聞き方であろう、私は背筋が熱くなるような思いを耐たえて、与一の顔を見上げた。与一はくずぬいて箸はしを嘗なめていた。私は胃の中に酔すが詰つまったように、――

—^{まぶた}瞼が腫れ上つて来た。

「どうして、今更そんな事を云うの、私を苛めてみようと思うンでしょう、——ねえ、どんなに貧乏しても苛めないで下さいよ、^{くだ}殴らないでよね、これ以上私達豊かになろうなんて見当もつかないけれど、これ以上に食えなくなる日は、私達の上に度々あるでしょうし、でも、貧乏するからと云つて、私の体を打擲しないで下さい。もしも、どうしても殴ると云うのンなら、私は……またあなたから離れなければならぬもの、それに、私は今度殴られたら、グラグラした右の肋骨の一本は見事に折れて、私は働けなくなってしまうでしょう」

「ホウ……そんなに前の男は君を殴っていたのかね」

「ええこのボロカス女メと云つてね」

「道理で君はよく^{ねごと}寝言を云っているよ。骨が飛ぶからカンニンしてツ、そう云つて夢にまで君は泣いているンだよ」

「だけど——けつして、別れた男が恋しくて泣いているんじゃないでしょう。あんまり苛められると、犬だつて寝言にヒクヒク泣いているじゃありませんか」

「責めているわけじゃない。よつぽど辛かつたのだらうと思つたからさ」

「この鰻はもう食べませんか」

「ああ」

飯台が小さいためか、魚が非常に大きく見えた。頭から尻尾しつぽまである魚を飯の菜にする
と云う事は久しくない事なので、私は与一の食べ荒らしたのまで洗うように食べた。与一
は皿さらの上に白く残った鰻の残骸ざんがいを見て驚いたように笑った。

「女と云う動物は、どうして魚が好きなのかね」

「男のひとは鰻うろこぎらが嫌いなンでしょう」

「鱗と云えば、お前が持つて来た鯉こいの地獄壺を割つてみないかね、引越しの費用位はある
だろう」

「そうねえ、引越し賃位はね……でも八円のこの家から拾七円の家じゃア、随分ずいぶんと差が
あるし、それに、昨日行つて見たきのうンだけれど、まるで狸たぬきでも出そうな家じゃありませんか」

「拾七円だつてかまうモンか、いい仕事がみつければそんなにビクビクする事もないよ」

「だって、あなたはまだ私より他にほか、女のひとと所帯を持った事がないからですよ。すぐ
手も足も出なくなるだろうと私は思うのだけれど——」

「フフン、君はなかなか経験家だからね、だが、そんな事は云わんもンだよ」

与一との生活に、もつと私に青春があれば、きつと私は初ういうい々しい女になったのだろうけれど、いつも、野良犬のらいぬのように食べる事に焦あせる私である。また二階けん借りから、一軒けんの所帯へと伸びて行く、——それはまるで、果てしのない沙漠さばくへでも出発するかのよう私をひどく不安がらせた。

四

風呂敷ふろしきの中から地獄壺を出して、与一の耳の辺で振ふつてみせた事が大きいそぶりであつただけに私は閉口してしまった。なぜならば、遠い旅の空で醬油飯しか食っていない、義父や母の事を考えると、私は古ハガキで、地獄壺の中をほじくり、銀貨と云う銀貨は、母への手紙の中へ札に替かえて送つてやっていたのである。いま、「割つてごらんよ」といわれると、中味が銅貨ばかりである事を知っている私は、何としても引込みがつかなく白状していった。

「割つてもいいのよ、だけれど……本当はもう銅貨ばかりになっていますよ」

「銅貨だつて金だよ、少し重いから式参拾銭はあるだろう」

この男は、精神不感性でもあるのかも知れない。風が吹いたほどにも眼の色を動かさないで、茶を呑んでいた。

「金と云うものは溜らぬものさ、——ああとうとう雨だぜ、オイ、弱ったね」

私は元氣よく、柱へ地獄壺を打ちつけた。

ひめくりは六月十五日だ。

大安で、結婚旅立ちにいい日とある。

午後から雷鳴が激しく、雹のような雨さえ降つて来た。

山国の産のせいであろう、まるで森林のように毛深い脚を出して、与一は忙がしく荷造りを始めた。私はひどく楽しかった。男が力いっぱい荷造りをしている姿を見ると、いつも自分で行李を締めていた一人の時の味気なさが思い出されてきて、「とにかく二人で長くやつて行きたい」とこんなところで、——妙にあまくなつてゆく。

私は塩たれたメリンスの帯の結びめに、庖丁や金火箸や、大根搗り、露杓子のような、非遊離的な諸道具の一切を挟んだ。また、私の懐の中には箸や手鏡や、五錢で

二切の鮭さけの切身なんぞが新聞紙に包まれてひそんでいる。

「そんなにゴタゴタしないで、風呂敷へでも包んでしまえよ」

「ええでもこうやって、馬穴バケツをさげて行こうかと思っているのよ」

私達が初めて所帯を持った二階借りの家から、その引越し先の屋敷跡へは、道程から云うと、五丁ばかりもあつたであろう。その僅わずか五丁もの道の間には、火葬場かそうばや大根畑や、墓すずや杉つぎの森を突切つぎらない事には、大変な廻まわり道になるので、私達は引越しの代を倅約けんやくするためにも、その近い道を通つて僅かな荷物を一ツ一ツ運ぶ事にした。荷物と云つても、ビール箱ばこで造つた茶碗ちやわん入れと腰こしの高いガタガタの卓子テーブルと、蒲団ふとんに風呂敷包みに、与一の絵の道具とこのような類たぐいであつた。

蒲団はもちろん私のもので、これは別れた男達の時代にはなかったものである。浴衣ゆかたのつぎはぎで出来た蒲団ではあつたが、——母はこの蒲団を送ってくれるについて枕まくらは一ツでよいかと聞いてよこした。私は母にだけは、三人目の男の履歴りれきについて、少しばかり私の意見を述べて書き送つてあつたので、母は「ほんにこの娘むすめはまた、男さんが違ちがうてのう」そのように腹の中では悲しがつていたのであろうが、心を取りなおして氣を利きかせてくれたのであろう、「枕は一ツでよいのか」と、書いてよこした。私は蒲団の中から出た母の

手紙を見ると何ほどか恥ずかしい思いであつた。上流の人達と云うものは、恥ずかしいと云う觀念が薄いと云う事を聞いているけれど——母親であるゆえ、下ぎまの者だから、なおさら恥ずかしいと思うまいと心がけても、枕の事は、今までに送つてもらつていゝとするならば、私はもう三ツ新しい枕を男のためにねだつてゐる事になる。そう考へてゆくと、ジンとするほどな、悲しい恥ずかしさが湧いて來た。

そのころ、与一は木綿もめんの掛蒲団一枚と熟柿じゅくしのような、蕎麦殻そばがらのはいつた枕を一ツ持つていた。私は枕がないので、座蒲団を二ツに折つて用ゐていたので、そう不自由ではなかつたが、目立つてその座蒲団がピカピカ汚よごれて來るのが苦痛であつた。それで枕は二ツいるのだろうと云つて寄こした母の心づかいに對して、私は二ツ返事で欲しかつたのではあつたが、枕は一ツでよいと云う風な、少々ばかり呆ぼやけさせた思ひ振ふりりを書き送つてやつたのである。すると最も田舎風な、黒塗くろぬりの枕を私は一ツ手にした。死んだ祖母の枕でもあつたのであろうが、小枕が非常に高いせいか、寝てゐるのか起きてゐるのか判わからないほど、その枕はひどく私の首にぴたりとしない。

後、私は蒲団の事については、長々と母へ札状を書き送つてやつたのであるが、枕の事については、札の一言も、私は失念したかの形にして書き添えてはやらなかつた。

五

躑躅はもちろん、うつぎや薊あざみの花や桐きりの木が、家の周囲を取り巻いていた。この広い屋敷の中には、私達の家の外に、同じような草花や木に囲まれた平家ひらやが、円を描えがいたようにまだ四軒ほども並ならんでいた。

家の前には五六十本の低い松の植込みがあつて、松の梢こずえから透すいて見える原っぱは、二百坪つぼばかりの空地あきちだ。真中まんなかにはヒマラヤ杉が一本植っている。

「東京中探しても、こんな良い所は無いだろうね」

与一はパレットナイフで牡蠣かきのように固くなつた絵の具をバリバリとパレットの上で引ひ掻つかきながら、越して来たこの家がひどく気に入った風であつた。

玄関げんかんの出入口と書いてある硝子戸ガラスドを引くと寄宿舎のように長い廊下ろうかが一本横に貫つらぬいて、それに並行へいこうして、六畳じようの部屋が三ツ、鳥の箱のように並んでいる。

「だけど、外から見ると、この家の主人は何者と判断するでしょうね、私はブリキ屋か、大工でも住む家のような気がして、仕方がないのよ」

「フフン、お上品でいらつしやるから、どうも似たり寄ったりだよ。ペンキ屋と看板出しておいたらいいだろう。——だが、こんな肩かたのはらない家と云うものは、そう探したつてあるもんじやないよ。庭は広いし隣となりは遠いしねえ……」

「隣りと云えば、今晩は蕎麦を持って行かなければいけないのだけれど、どうでしょうか」
「幾つずつ配るもんだ？」

「そうね、三つずつもやればいいんでしよう」

引越した初めというものは、妙に淋しく何かを思い出すのだ。私は何度となくこのような記憶がある。別れた男達と引越しをしては蕎麦を配った遠い日の事、——もう窓の外は暗くなりかけている。私は錯覚さつかくを払いはらいのけるように、ふっと天てん井じょうを見上げた。

「オヤ、電気もまだ引いてないんですよ」

「本当だ、引込線も無いじやないか、二三日は不自由だね」

長い間の習癖しゅうへきと云うものは恐ろしいものだ。私は立ち上ると、人差指で柱の真中辺を二三度強く突いて見た。すると、私自身でも思いがけなかったほど、その柱はひどくグラグラしていて天井から砂すなほこり埃ちりが二人の襟えり足あしに雲脂ふけのように降りかかって来た。

「ねえ、これはあんた、潰つぶしにしたつてせいぜい貳参拾円で買える家ですよ。どう考えた

って、拾七円の家賃だなんて、ひどすぎるわ、馬鹿だと思わわ」

与一は沈黙^{だま}って、一生懸命^{いっしょうけんめい}赤い鼻の先を擦^{こす}っていた。「この女は旅行に出て、色々世話を焼きたがる女に違いない。前の生活で質屋の使いや、借金の断りや、家賃の掛^かけひき引なんぞには並々^{なみなみ}ならぬ苦勞を積んで来たのであらう」与一はそんな事でも考えていたらしく、ズシンと壁に背を凭^{もた}せかけて言った。

「僕は^{ぼく}とてもロマンチストなんだからね、だが、君のどんどころに僕は惹^ひかされたんだらう……」

そうむきになって云われると、私はまた泪^{なみだ}ぐまずにはいられなかった。「またこの男も私から逃げて行くのだろうか」男心と云うものは、随分と骨の折れるものだ。別れた二人の男達も、あれでもない、これでもないと言って、金があると埒^{らち}もなく自分だけで浪費^{ろうひ}してしまつて、食えなくなるとそのウツプンを私の体を打擲する事で誤魔化していた。

「ねえ、私のような女は、そんなに惹^{あて}かされない部類の女なの？ だって夫婦^{ふうふ}ですものね、それに、私は誰からも金を送つてもらう当^{あて}はないし……」

与一は二寸ばかりの黄色い蠟燭^{ろうそく}を釘箱^{くぎぎ}の中から探し出すと、灯をつけて台所のある部屋^への方へ疳^{かん}性^{しょう}らしく歩いて行つた。真中の暗い部屋に取り残された私は、仕方なく濡^ぬ

れた^{たみ}畳に腹^{はら}這^はつて、袖^{そで}で臉をおおい、「私だつてロマンチストなのよう」と何となく声をたてて唄^{うた}つてみた。

六

長いこと、人間が住まなかつたからであろう、部屋の中は馬糞^{ばふん}紙のような、ボコボコした古い匂^{にお}いがこもつていて、黒い畳の縁には薄く^{かび}黴^{あそ}の跡があつた。

「おい、隣りだけでも蕎麦を持って行つといた方が都合がいいぜ、井戸^{いど}が一緒らしいよツ」カツンカツン鴨居^{かもい}に何かぶつつけながら与一は不興氣に私に呶^ど鳴^なつた。

私は参拾錢の蕎麦の券を近所の蕎麦屋から一枚買つて来ると、左側の一軒目の家へ引越しの挨拶^{あいさつ}に出向いた。

隣りと云つても、田舎風にポツンポツンと家の間に灌^{かん}木^{ぼく}が続いているので、見たところ一軒家も同然のところである。私は何度も水を潜^{くぐ}つて垢^{あか}の噴^ふき出たようなネルの単衣^{ひとえ}を着て、与一のバンド用の、三尺帯をぐるぐる締めていた。

「何をする人だろう」と考えるに違いない。尋ねた場合は、「絵の先生をしています」でも濁しておこうと、私は私の家と同然な御出入口と書いてあるその硝子戸を引いた。

この家の主は、よつぽど白い花が好きと見えて、空地と云う空地には、早咲きの除虫菊のようなのが雪のように咲いていた。

家根の上から白い煙があがっている。

花の蔭では、蛙が啼くから帰ろうと歌って、男の子がポツンとひとりで尿をしている。

一軒だけ挨拶を済まして帰って来ると、与一は、私を買って来ておいた、細い壺銭蠟燭に灯をつけて台所に続いた部屋の壁に何かバタバタ張りつけていた。

家の中はもう真暗だ。

「何をする人なんだ？」

「煙草専売局の会計をしてるんですってよ」

「ホウ、固い方なんだね」

土色の壁にはモジリアニの描いた頭の半分無い女や、デイファイの青ばかりの海の絵が張

つてあつた。

こんな出鱈目な色刷でも無聊な壁を慰めるものだ。灯が柔いせいか、濡れているように海の色などは青々と眼にしみた。

「その隣りが気合術診療所よ」

「ヘエ、どんな事をやるンかね」

「私一人でこの家を見に来た時、気合術診療所の娘が案内してくれたのよ、とてもいい娘だわ」

「そう云えば、僕もあの娘が連れて来てくれたんだが、俺ンとこと同じようなもんらしい、瓜、トマト、茄子の苗売りますなんて、木の札が出るあそこなんだろう」

与一が灯を持つて、三ツの部屋を廻るたび、私はまるで蛾のようにくつついて歩いた。右側の坊主畳の部屋には、ゴッホの横向きの少女が、おそろしく痩せこけて壁に張りついている。その下には筆筒の一ツも欲しいところだ。この部屋は寝室にでも当てるにふさわしく、二方が壁で窓の外には桐の枝がかぶさり、小里万造氏の台所口が遠くに見えた。

真中の部屋はもちろん与一のアトリエともなるべき部屋であろうが、四枚の障子が全部廊下を食っているので、三ツの部屋の内では、一番そうぞうしい位置にあった。

与一は、この部屋に手製の額に入れた自分の風景画を一枚飾りつけた。あんまりいい絵ではない。私はかつて、与一の絵をそんなに上手だと思つた事がない。それにひとつは私は、このように画面に小さく道を横に描くことはあんまり好きでないからかもしれない。「私は道のない絵が好きなんだけれど」そうも言つてみた事があるけれど、与一はむきになつて、茶色の道を何本も塗りたくつて、「君なんか絵がわかつてたまるもんか」と、与一はそう心の中で思っているのかも知れない。

七

山は静かにして性をやしない、水は動いて情を慰む、静動二の間にして、住家を得る者あり、私は芭蕉ばしょうの洒落堂しゃれどうの記と云う文章の中に、このようにいい言葉があると与一に聞いた事がある。

そんなによい言葉を知っている与一が、収入の道と両立しない、法外もなく高い家賃で、馬かなんぞでも這入つて来そうな、こんな安住の出来そうもない住家に満足している事が淋しかった。

台所の流しの下には、根笹ねざさや、山牛蒡やまごぼうのような蔓草つるくさがはびこっていて、敷居しきいの根元は蟻ありの巣すでぼろぼろに朽くちていた。

「済みませんねえ。疲つかれていなくなったら台所へ棚たなを一つ吊つるして下さい」

「棚なんか明日にして飯にでもしないか」

「ええだけど何も棚らしいものがないから、どうにも取りつき場がないわ」

「眼まが舞まいそうだ。飯にしよう」

与一が後ろ鉢巻はちまききを取りながら、台所へ炭箱すみを提さげて来た。

鮭さけが二切れで米が無い。

それで、与一が隣りの部屋に去ると、私は暗がりの中に、割りそこなつた鯉こいの地獄壺じごくかを尻尾の方から石でもつてコツンコツンと割つてみた。

脆もろい土屑つちくずがボロボロ前掛けの上に壊こわれて、膝ひざの上に溢あふれた銅貨は、かなりズシリと重みがあつた。どれを見ても銅貨のようだ。私は一ツ一ツ五拾錢銀貨が一枚ぐらい混まざつてはいはないかと、膝の上にこぼれた錢の縁を指で引搔ひいて見た。

銅貨がちょうど二十枚で、拾錢の穴明き錢と五拾錢銀貨が一枚ずつ、私の胸はしばらくは子供のようどうきに動悸どうきが激しかった。

抜き替えたこの一錢銅貨がみんな五拾錢銀貨であつたならば、拾円以上にもなっているであろう——私は箆ざるを持つと、暗がりの多い町へ出て行つた。

軒のきの低い町並みではあるけれど、割合と色々な商い店が揃そろつていて、荷箱のように小さい、鳩はとと云う酒場などは、銀座を唄つたレコードなんかを掛けていたりした。

その町の中ほどには川があつた。白い橋が架かつてゐる。その橋の向うは、郊外こうがいらしい安料理屋が軒を並べていて、法華寺ほつけじがあると云う事であつた。

私は米を一升しょうほどと、野菜屋では、玉葱たまねぎに山東菜さんとうなを少しばかり求めて、猫ねこの子でも隠かくしているかのように前掛けでくると巻くと、何度となく味わつたこれだけあれば明日いっぱいとは云う心安さや、またそんな事をいつまでも味わつて暮さなければならなかつた度々の男との記憶——いつそ、どこかに突き当つて血でも吹き上げたならば、額でも割つて骨を打ち砕くだいたならば、進んで行く道も判然とするであろう。仕事をするためにか、食べるためにか、どんなために人間は生きてゐるのであるうか、私は毎日が一時しの凌しのぎばかりであるのが、だんだん苦痛になつて来ていた。

手探りで枳からたちの門を潜ると、家の中は真暗で、台所の三和土たたくの上には、七輪の炭火だけが目玉のように明るく燃えていた。

「どこへ行つていたんだ？」

「私、ねえ……お米が無かったから、通りへ行つていたのよ」

「米を買いに？　なぜそう早く云わないんだ。もう動けないよッ」

与一は大の字にでも寝ているらしく、そういうながら、転々と畳をころがっているよう
なけはいがしている。

「早くそう云うつもりで云いそびれたのよ、……すぐ焚^たけるからねえ」

「うん、——あのね、何も遠慮する事はないんだよ。金が無かったら無いようにハッキリ
云いたまえ。ハッキリと云えばいいんだ。……俺は明日上野の博覧会にでも廻ってみよう。
ペンキ屋の仕事のこぼれが少しはあるだろうと思うんだ。働かないで絵を描いて行こうな
んて虫が良すぎる。そうだよ！　芸術だの、絵だのって、個人の慰みもンだアね、俺なん
かペンキで夏のパノラマでも描いて、田舎の爺^{じい}さん婆^{ばあ}さんに見てもらった方が相当なンか
も知れないよ、それが似合っているんだ」

「あなた、私を叱っているんですか？」

「叱って。叱ってなんかいないよ、だから厭^{いや}なんだ、君はひねくれない方がいい。——僕
が君に云ったのは貧乏人はあんまり物事をアイマイにするもンじゃないと云う事だ。遠慮

なんか蹴飛ばしてハッキリと、誰にだって要求すればいいじゃないかッ！ ヒクツな考えは自分を墮落させるからね」

米を洗っていると泪が溢れた。

卑屈になるなど云った男の言葉がどしんと胸にこたえてきて、いままでの貞女のような私の虚勢が、ガラガラと惨めに壊れて行つた。

与一はあらゆるものへ絶望を感じている今の状態から自分を引きずり上げるかのような、まるで、筈のようにピシピシした声で叫んだ。

「今時、溺れるものが無ければ生きて行けないなんて、ゼイタクな気持ちは清算しなければいけないんだ。全く食えないんだから……」

「食わなくなつたつて、溺れていた方がいいじゃないの……」

「君はいつたい何日位飢える修養が積ンであるのかね、まさか一年も続くまい」

八

清朗な日が続いた。

井戸端に植えておいた三ツ葉の根から、薄い小米のような白い花が咲いた。

壁のモジリア二も、ユトリオもデイフィも、おそろしく退屈な色に褪めてしまつて、私は、与一が毎朝出掛けて行くと、一日中呆んやり庭で暮らした。

人気のない部屋の空気と云うものはいつも坐っている肩の上から人の手のように重くのかかつて来る。まして家具もなく、壁の多い部屋の中は、昼間でも退屈で淋しい。

青い空だ。

白米のような三ツ葉の花が、ぬるく揺れている。

「小母さんはどうして帯をしないのウ」

蛙の唄をうたつた小里氏の男の子が、こまつしやくれた首の曲げ方をして、私の腰のあたりを不思議そうに見ている。

「小母さんは帯をすると、頭が痛くなるからねえ」

「フン、——僕のお父ちゃんも頭が痛いのに」

私は、青と黄で捻つたしで紐で前を合わせていた。——ああ、疲れた紅いメリンスの帯はもうあの朝鮮人の屑屋の手から、どこかの子守女へでも渡っている事だろう。帯を売つ

て五日目だ。もう今朝は上野へ行く電車賃もないので、与一は栗色の自分の靴をさげて例の朴のところへ売りに行った。

「何ほどつて？」

「六拾銭で買つてくれたよ」

「そう、朴君はあの靴に四ツも穴が明いているのを知っていたんでしょか？」

「どうせ屋敷めぐりで、穴埋めさ、味噌汁吸つて行けつてたから呑んで来た」

「美味かつた？」

「ああとても美味かつたよ……式拾銭置いとくから、何か食べるといい」

私は今朝から式拾銭を握つたまま呆んやり庭に立っていたのだ。松の梢では、初めて蝉がしんしんと鳴き出したし、何もかもが眼に痛いような緑だ。

唾を呑み込もうとすると、舌の上が妙に熱っぽく荒れている。何か食べたい。——赤飯に支那蕎麦、大福餅にうどん、そんな拾銭で食べられそうなものを楽しみに空想して、私は二枚の拾銭白銅をチリンと耳もとで鳴らしてみた。

しんしんと蝉は鳴いている。

透けた松の植込みの向うを裸馬が何匹も曳かれて通る。

「良いお天気で……」

屑屋の朴が秤はかりでトントントン首筋を叩きながら、枳の門の戸を蹴飛ばして這入って来た。

「朴さん、あの靴、穴が明いていたでしょうに……」

「よろしいよ。どうせ屋敷で儲もうけるからねえ」

「助かりましたわ」

「よろしいよ。小松さんは帰りは遅おそいですか？」

「ええいつも夜になつてから……」

「大変ですな。——ところで、石油コンロ買いませんか、金は三度位でよろしいよ」

「ええ……どの位ですウ」

「九拾銭でよろしいよ。元々、便利ですよ」

朴は冷々と気持ちがいいのであろう、玄関の長い廊下に寝そべって、私が石油コンロを鳴らしている手附てつきを見ていた。大分、錆附さびついてはいたけれど、灰色のエナメルが塗ぬってあって妙に古風だ。心に火をつけると、ヴウ……と、まるで下降している飛行機うなの唸りのような音を立てる。

「石油そんなに要いりません。一罐かんみつ三月もある。私の家もそう」

石油コンロを置いて朴が帰ると私はその灰色の石油コンロを、台所の部屋の窓ぎわに置いて眺めた。家具と云うものは、どうしてこんなに、人間を慰めてくれるのだろう。

夕方井戸端で、うどんを茹でた汁を捨てていると、小里氏の子供が走って来て空を見上げた。

「ねえ、小母さん！ 飛行機が飛んでらア」

「どこに？」

「ホラ、音がするだろう……」

私は、空を見上げている子供の頭を撫でていった。

「小母さんところの石油コンロが唸っているのよ、明日お出で、見せて上げるから……」
そういつて聞かせても、子供は、（炭や薪で煮焚きしているのであろう、小里氏の屋根の煙を私は毎日見ている）不思議そうに薄暗い空を見上げて、「飛行機じゃないの」といつていた。

与一は日記をつけることがこまめであつた。私であつたら、馬鹿らしく、なにも書かないでいるだろう、そんな無為に暮れた日でも、雨だの、晴れだの与一は事務のようにかき込んでいた。

雨だの晴れだのが毎日続くと、与一自身もやりきれなくなってしまうのか、ついには「蚊帳が欲しい」とか「我もし王者なりせばと云う広告を街で見ろ」そんな事などが書き込まれるようになった。

だが飢える日が鎖のように続いた。もうこまめな与一も日記をほうりっぱなしにして薄く埃をためておく事が多くなつた。

そうして、日記の白いままに八月に入つたある朝、——跌ずいた夢でも見たのであろう、私は眼が覚めると、私はいつものように壁に射した影を見ていた。浅黄色の美しい夜明けだ。光線がまだ窓の入口にも射していない。

その時、私は新しい靴の音を耳にした。「まだ五時位なのに誰だろう」そんな事を考えながら、襖を押して庭の透けて見える硝子戸を覗くと、大きな赭ら顔の男が何気なく私の眼を見て笑つた。背筋の上に何か冷いものが流れた気持ちであつたが、私も笑つてみせ

た。

「小松君起きてるウ？」

「随分早いですね、ただ今起します」

朝の光線のせいか、何もかも新しいものをつけている紳士しんしが、このように早く与一を尋ねて来ると云う事は、よっぽど親しい、遠い地からの友人であろうと、私は忙がしく与一を揺り起した。

「そんな友人無いがね、小松って云ったア？」

「ええ、起きているかつて笑って云っているのよ」

「変だなア」

与一が着物を着ている間に、私は玄関の鍵かぎを開けた。

すると、どうであろう、四五人の紳士達が手に手に靴を持ったまま、一本の長い廊下を、何か声高く叫びながら、三方に散って行った。驚いて寢室に逃げこむ私の後からも、二人の紳士が立ちはだかつて叫んだ。

「君が小松与一君かね？」

与一も面喰^{めんくら}つたのだろう、脣^{くちびる}を引きつらせてピクピクさせていた。

「ちよつと、署まで来てもらいたい」

「へえ、……いったい何ですウ、現行犯で立小便位なら覚えはあるンですが、原因は何んですウ」

「そんなに白っぽくなくてもいいよ」

「君は小松与一だろう？」

「そうですよ。小松与一と云うペンキ屋で、目下上野の博覧会でもって東照宮の杉の木を日慣らし七八本は描いていますよ」

「フン君が絵を描こうと描くまいと、そんな事はどうでもいいんだ、一応来てもらいたい」

「思想犯の方ですか？——僕は今ところは臨時雇^{やと}いで、今日行かないと、また、外の奴^{やつ}に取られツちまうんですがね」

「まあ、男らしく来て、一応いい開いたらいいだろう」

「何時間位かかるンですか？ 長くかかるンじゃないンですか？」

落ちついたのか与一は脣^{ゆゑ}を弛^{ゆる}めて笑い出した。

「二十九日だなんて事になると厭だから、こんなモンでもお見せしましょう」
 そういつて押入れの中から、与一は召集令状しょうしゅうを出して見せた。

「本当に何か人違いでしょう？ 僕はこの月末はこうして、三週間兵隊に行くんですがね」
 他の二ツの部屋を調べた紳士諸君も呆んやりした顔で、

「オイ、どうも人違いらしいぜ」

「そんな事はない。この男だよ、僕は確証を得ているんだ」

「そうかねえ、でもちよつとおかしいよ君、——君、この与一は雅号がごうではないだろうね。」

本名は小松世市、こう書くんだろう」

「だから、召集令状を見たらいいでしょう」

一枚の小さな召集令状が、あつちこつちの紳士諸君の手に渡った。

「不思議だねえ、もいちど探しなおしだ。ところで、他に客は無いだろうね」
ほか

枳の門の外には、白い小型の自動車が待っていた。仕入れに行く魚屋や、新聞配達等が
 覗いている。

「チエツ、何のために月給貰もらっているんだ。おいッ！ 加奈代かなよ、塩まを撒いてやれ」

「だって、塩がないのよ」

「塩が無かったら泥どろだっていいじゃないかッ、泥が無かったら、石油でもブツかけろ」

「こんなに家中無断で引掻ひっかきまわして、済みませんなんて云わないッ」

「云うもんか……あんなのを見ると、食えないで焦いらいら々しているところだ、赤くなりたくもなるさ」

「小さい頃、私の義父とさんも、路傍に店を出して、よく巡査じゆんさにビンタ殴られていたけれど——全く、これより以上私達にどうしろって云うのかしら？」

十

上野の博覧会の仕事もあと二三日で終ると云う夕方、与一は頭中を繃帶ほうたいで巻いて帰つて来た。

「八方塞ふさがりかね。オイー！ 暑いせいか焦けんか々して喧嘩けんかしちまったよ」

「誰とさア」

「なまじつ油絵の具を捏こねた者は、変な気障きざさがあつて困るって、ペンキ屋同士が云つ

てるだろう、だから、僕の事なんですか、僕の事なら僕へはつきり云って下さいって、云ってやったんだ。するとね、あちんぴら絵描きは骨が折れるって云ったから、何をお高く止ってるんだ馬鹿野郎^{やろう}、ピンハネをしてやがってと呶鳴ってやったら、いきなりコップを額にぶっつけたんだ」

「マア、まるで土工みたいね、痛い？」

「硝子がいっただけ^{だいじょうぶ}大丈夫だろう」

バンド代りに締めた三尺帯の中から、与一は十三日分の給料を出していった。

「日当貳円五拾錢だちって、こうなると、五拾錢引いてやがる。おまけに、会場の方は俺達の分を四円位にしろといひてピンを刎^はねるんだから、やりきれないさ」

それでも、参拾円近い現金は、ちよつと胸がドキリとするように嬉^{うれ}しかった。

「でも、故意に喧嘩して、止めさせるんじゃないの？」

「そうでもないだろうが、皆^{みな}不平を云いながら、前へ出るとペコペコしてるんだからね」
「そんなものよ」

ひさ
久し振^{ひさぶ}りに石油を一升買った。

灰色の石油コンロは、円い飛行機のような音をたてて威勢よく鳴っている。

二人は庭へ出て水を浴びた。

あおぐろ
黝くなつた躑躅の葉にザブザブ水を撒いてやりながら、何気なく与一の出発の日の事を考えていた。

「もう後六日で兵隊だねえ……」

「ああ」

「留守はどうしよう」

「参拾円近くあるじゃないか、俺の旅費や小遣いは五円もあればいいし、家賃は拾円もや
つとけば、残金で細々食えないかい？」

「そうだね」

気合術診療所から貰つて来たトマトの苗が、やつと三ツばかり黄色い花を咲かせていた。
あの花が落ちて、赤い実が熟する頃は帰つて来るのだろう。——私一人で何もしない生活
の不安さや、醤油飯の弁当を持って海兵团へ仕事に行っていた義父が、トロツコで流され
たという故郷からの手紙を見て、妙に暗く私はとらわれて行つた。

唐津出来の茶碗ちやわんや、皿さらや井どんぶりなどを、座いざを敷いて、「どいつもこいつも、茶碗で飯を食わねんだな、ホラ唐津出来の茶碗だ。五ツで二分と負けとこウ、これでも驚かなきや、ドンと三貫かん、ええッこの娘もそえもンで、式拾五錢、いい娘だぜ、髪が赤くて鼻たらし娘だ！」

私は、長崎ながさきの石畳の多い旧波止場で、義父が支那人の繻子しゆす売りなんかと、店を並べて肩肌かたはだ抜いで唐津の糶せり売りしているのを思い出した。黄色いちゃんぽんうどんの一杯ぱいを親子で分けあつた長い生活、それも、道路妨害ぼうがいとかで止めさせられると、荷車を牽ひいて北九州の田舎をまわつた義父の真黒に疲れた姿、——私は東京へ出た四年の間に、もう式拾円ばかりも、この貧しい両親から送金を受けている。

結局、義父たちが佐世保に落ちついてもう一年になるけれど、海兵団のトロ押しが、とうとう義父の働く最後であつたのかも知れない。

暗雲やみくもにヒツパクした故郷からの手紙だ。

——それで、おまえが、なんとかなれば七円ほど、くめんをして、しきゆう、たのむ、おとつさんも、いたか、いたか、きつてくれ、いいよんなはる。せきたんさんで、あ

らいよつとじやが、びょういんにいったほうが、よかあんばいのごとある。

私は夕飯の済んだ後、与一に故郷からの手紙を見せようと思った。与一は何か考えているのであろう、何となく淋しそうに窓に凭れて唄をうたっていた。その唄の節はひどく秋めいた、憂愁のこもったものであった。私は何度となく熱い茶を啜りながら、手紙を出す機会を狙っていたが、与一はいつまでもその淋し気な唄を止めなかった。

十一

沈黙つて故郷へは送金しよう、——私はそう思つて毎日与一の額の繃帯を巻いてやった。ちよつとした怪我でも痛いんだから、これで腕や脚を切断するとなると、どんなでしよう？」

「それはもう人生の終りだよ、俺だつたら自殺する」

「働かないとなると、生きていても仕様がなからね……」

与一が、山の聯隊へ出発した日は、空気が灰色になるほど風が激しかった。「まるで

春のようだ、気持ちの悪い風だ」誰もそういいながら停車場に集った。

「石油コンロは消してあったかい？」

与一は、こんな事でもいうより仕方がないといった風に、私の顔を見て笑った。

奉公袋ほうこうぶくろを提げげて下駄げたをはいた姿は、まるで新聞屋の集金係りのようで、私はクツクツと笑い出して、「火事になった方がいいわ」と、言葉を誤魔化した。

「一人で淋しかったら、診療所の娘でも来てもらおうといい」

「大丈夫ですよ、一人の方が気楽でいいから……」

与一に対して、何となく肉親のような愛情が湧わいた。かつての二人の男に感じなかった甘さあまが、妙に私を泪なみだもろくして、私は固く二重顎あごを結んで下を向いた。

「厭いやなつちやう、まったく……」

私は甘いものの好きな与一のために、五銭のキャラメルと、バナナの房ふさぎを新聞に包んで持たせてやった。

「どうせ今晩は宿屋へでも泊とまるンでしょう？」

「知った家はないし、どうせ兵營の傍の木賃泊りだ」

「召集されて随分悲惨ひさんな家もあるンでしょうね」

「ああ、百姓^{ひやくしやう}なんか収^{しゆう}穫^{かく}時^{とき}だ、實際困るだろう」

海水浴場案内のビラが、いまは寒氣にビラビラしていて、駅の前に行く女達の薄着^{すそ}の裾^{すそ}が帆^ほのようにふくれ上つていた。

拡声機は発車を知らせている。

「元気でいるンだよ」

長いホームを歩いている間中、与一は同じ事を何度も繰^くり返した。私は、そんな優しい言葉をかけられると、妙に胸が詰つた。で、いかにも間拔けた女らしく見せるべく、私は頬^ほつぺたをふくらまして微笑^{ほほえ}んでみせた。頬^{ほお}をふくらましていると、眼の内が痛い。私はじつと唇をつぼめて、与一が窓から覗くのを待った。

山へ行く汽車は煤^{すす}けたままで、バタバタ瞼のように窓を開けた。窓が開くと、たくさん見送りが、蟻のように窓に寄った。与一は網^{あみ}棚^{だな}の上に帽子^{ぼうし}と新聞包みを高く差し上げている。咽喉^{のど}仏^{ぼけ}が大きく尖^{とが}つて見えた。その逞^{たくま}しい首を見ていると、耐えていた泪が鼻の裏にしみて、私は遠い時計の方を白々と見るより仕方がなかった。

「おいッ!」

与一はもうキャラメルを一ツむいて、頬^ほばつたらしく、口をもぐもぐさせて私を呼んだ。

「何？」

「キャラメル一ツやろう」

誰も私達の方を向いてはいなかった。与一の座席は洗面所と背中合せなので気楽に足を投げ出して行けるだろう。与一は思い出したように指を折って、「三七、二十一日もかかるンかね」一人で呟つぶやいてうんざりしたかの風であつた。

「誰も見てくれるモンが無いンだから、病氣をせんように、氣をつけるンだぞ」

私は汽車が早く出てくれるといいと念じた。焦々した五分間であつた。その辛いつら気持ちをお互たがいにぎつくばらんにいえないだけに、余計焦々して私はピントを合せるのに、微笑の顔が歪ゆがみそうであつた。

十二

一人になったせいであろう。昼間でも台所の部屋などは、ゴソゴソと穴蔵こおろぎ蛭が幾つも飛んでいた。与一が発して九日になる。山から来た最初の絵葉書には、汽車が着いて、谷間の町の中を、しかも、夜更けて宿を探すに厭な思ひをしたと書いてあつた。

第二番目の葉書には、松本市五〇聯隊留守隊、第二中隊召集兵、小松与一宛と住所が通知してあつた。

三番目の絵葉書は、高原の白樺しらかばが白く光つて、大きい綿雲の浮いた美しい写真であつた。文面には、「今日は行軍で四里ばかり歩いた。田舎屋で葡萄ぶどうを食べて甘美うまかつた。皆百姓は忙がしそうだ。歩いていると、呑気のんきなのは俺達ばかりのような気がして、何のために歩いているのか判らなくなつて来る。こうしていても、気が気でないと云う男もいた。留守はうまくやつて行けそうか。知らせるがいい」こんな事が書いてあつた。

私は徒爾いたずらな時間をつぶすために、与一の絵葉書や手紙を、何度となく読んでまぎらした。あの下駄はどう処分したであろうか、遅しい軍人靴をはいて、かえつて、子供のようにな楽しんでゐるかも知れない。出発の日の与一の佻わびしい姿を思うと、胸の中が焼けるように痛かつた。

第四番目の手紙は、どうも俺は、始終お前に手紙を書いているようだ。お前は甘い奴と思うかも知れない。——遠く離はなれて食べる事に困らないと、君がどんな風に食べているんだらうと云う事が案ぜられるのだ。まだ一度も君から手紙を貰っていない。君もこれから生活にチツジョを立てて、本当に落ちついたらいいだらう。落ちつくと言ふ事は、ブルジ

ヨアの細君の真似まねをしると云うのではない。俺と君の生活に処する力を貯たくわえる事さ。金のある奴達は酒保へ行く。無いものは班ばんにいて、淋さみしくなると出鱈目でたらめに唄うたをうたう。唄うたをうたう奴達は、收穫ととを前にして焦こ々々しているのだろう。俺の隣のベッドに舶大工ふなだいこがいる、子供三人に女房にようぼうを置いて来たと云つて、一週間目に貰もらった壺円かぶ足らずの金を送つてやつていた。そんなものもあるのだ。マア元氣でやつてくれるように、小鳥が飼かつてあるとか、花でも植えてあるならその後成長はどんな風かとも聞けるが、そこには君自身の外に、何も無いんだからね。――元氣で頼たのむ」

かつて知らなかった男の杳々ようようとした思いが、どんなに私を涙なみだつぽく愛かなしくした事であらう。

私は手鏡へ顔を写してみたりした。「お前も流浪るろうの性じや」と母がよく云い云いしたけれど、二十三と云うのに、ひどく老ふけ込んで、唇などは荒すさんで見えた。瞼まぶたには深い影がさして、あのように誇ほこつていた長い睫まつげも、抜けたようにささくれて、見るかげもない。

紅べにもなければ白粉おしろいもない、裸のままの私に、大きい愛情をかけてくれる与一の思いやりを、私は、過去の二人の男達の中には探し得なかった。それに、子供の頃の母親の愛情なんかと云うものは、義父のつぎのもののようにさえ考えられ、私は長い間、孤独こどくのまま

にひねくれていたのだ。

五番目の手紙には、「まだ、お前の手紙を手にしな。君は例の変な義理立てと云った風なものに溺^{おぼ}れているのだろう。もう一二年もたったらそれがどんなに馬鹿らしかったかと解^{わか}るだろうが、そんな古さは飛び越える決心をして欲しい。君は、僕に、なるべく悪い事を聞かすまい、弱味を見せまいとしているらしいが、そんな事は吹けば飛ぶような事だ。マア、とにかく困った習癖^{しゅうへき}だと云っておこう。同封^{どうふう}の金は、隊で貰ったのと、東京を出る時、旅費や宿料の残りだ。僕は壹錢もなくなった。だが生きるようなものは食っている。困らない。山は快晴だ」

第六番目の手紙、「君は僕の心の中で、だんだん素直に成長して行く。手紙は読んだ。一字も抜かさないように読んだ。君のように忽々^{そうそう}と読むンではない。君の姿を空想して読むのだ。僕の送った貳拾円ばかりの金が、よっぽど応^{こた}えたらしいが、何かあるのだろうとは思っていた。——お母^{かあ}さんへ拾五円送ったって、そんな事を僕が怒^{おこ}ると思つたら、君は僕の事について認識不足だよ。僕からも、佐世保へ手紙を出しておこう。君は働きたいとあるが、それもいいだろう。

貳円ぐらいでは十日も保つまいし、ただ女給と云う商売は絶対に反対だ。威張る商売ではない。僕は色々の事を兵營で考えさせられた。——ところで、こんな甘いことも時に考える。二人で佐世保へ新婚旅行ぐらいしてみたいとね。兵營の中は殺風景で、寝ても起きても女の話だ。僕もそろそろ君への旅愁がとつき始めた。十日すれば会える。女給以外の仕事であつたら、元氣に働いて生きていてくれ。小里氏が気が狂ったそうだが、気の毒な隣人は大いに慰さめてあげる事だ」

トマトの花が落ちて、青い実を三ツ結んだ。かつてなかった楽しさが、非常に私を朗らかにした。私は与一の手紙が来てから、朴の紹介で、気合術診療所の娘と、朝早く屑市場へ浅草紙を造る屑を扱りに通った。

日曆を一枚一枚ひっぺがしては、朝の素晴しく威勢のいい石油コンロの唸りを聞いて、熱い茶を啜る事が、とても爽やかな私の日課となった。

第七番目、第八番目、第九番目、山の兵營からの手紙は頬を染めるような文字で埋っている。——吾木香すすきかるかや秋くさの、さびしききはみ、君におくらむ。とても与

一の歌ではあるまい。だが眼の裏に浸^しみる歌のひとつではあった。

（昭和六年十一月）

青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 林芙美子」筑摩書房

1992（平成4）年12月18日第1刷発行

底本の親本：「現代日本文学大系69」筑摩書房

1969（昭和44）年

初出：「改造」

1931（昭和6）年11月

入力：土屋隆

校正：林幸雄

2006年9月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

清貧の書

林芙美子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>